



### 板橋 淳也 (いたばしじゅんや)

福島県三島町出身。2019年10月より三島町教育委員会生涯学習課長。前職は三島町生活工芸館長。1970年代から継続している三島町の生活工芸運動を継承発展させ、「生活工芸アカデミー」の開設や手仕事が生まれる空間の再現として「工人の館」をオープン。本ツアーでは、生活工芸運動が生まれた背景と現状などについて解説した。



### 榎本 千賀子 (えのもとかこ)

東京都出身。写真家。写真研究者。2016～2019年まで金山町教育委員会職員として「村の肖像プロジェクト」に携わる。町の映像資産の調査収集、関連する聞き取り調査、展示、ワークショップ、写真集の編集を行い、同事業を通して金山町に暮らす人々の中に息づく考え、暮らし方を顕在化させた。本ツアーでは同プロジェクトについて解説。



### 天野 和彦 (あまのかずひこ)

一般社団法人ふくしま連携復興センター代表理事。特別支援学校の教員として15年間障がいを持った子どもたちの教育に携わる。福島県教育庁社会教育主事として社会教育・生涯学習行政にも従事。震災後、県内最大規模といわれた「ビッグパレットふくしま避難所」の県庁運営支援チーム責任者、富岡町生活復興支援おだがいさまセンター長等を歴任。2017年4月より現職。



福島県東部の太平洋側（浜通り）と東北新幹線が走る中央部（中通り）の間の山間地に位置する川内村。2011年の原発事故により全村避難となりましたが、2016年に避難指示が解除。避難以前の山の暮らしを見直したコミュニティづくりに取り組んでいます。本ディスカッションでは、奥会津の電源開発と山の暮らしについて三島町と金山町の事例をお聞きし、山の暮らしを大切に山に生きることを選んだ奥会津と川内村の、歴史と現在を交差させました。自然の美しさ、豊かさ、そして抱える課題。二つの土地から学ぶことは、日本各地が抱える課題とも共鳴しました。

# 私たちが 大切に したいこと

## 奥会津から川内の未来を考える

オープンディスカッション

日時：11月26日(火) 17:00~18:30  
 会場：天山文庫(川内村)  
 講師：板橋淳也氏(三島町教育委員会生涯学習課長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)  
 榎本千賀子氏(元金山町教育委員会職員/写真家/写真研究者)  
 モデレーター：天野和彦氏(一般社団法人ふくしま連携復興センター代表理事/福島大学特任教授/  
 ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)  
 司会：小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)  
 協力：川内村教育委員会

事務局・小林めぐみ

今日はお忙しい中お越しくださいましてありがとうございます。まず、今日ここ天山文庫でこうやってトークイベントさせていただくようになった経緯を、説明させていただきたいと思います。県立博物館学芸員の小林と申します。今日の事業は、ライフミュージアムネットワークという事業名になります。県立博物館が昨年度から事務局を務めて県内外のミュージアムや大学やNPOさんなどと連携しながら行っているものです。ライフは日本語でいうと「いのち」だったり「くらし」だったりします。震災後私たちがあらためて大切にしなければいけないのは「いのち」であり「くらし」ではないだろうか、そんなことをこの数年間の震災後の活動で考えました。それをみなさんと考え直したり、未来に残していくためにミュージアムの連携をベースにして活動していければいいんじゃないか、そんなことでスタートしたものです。博物館ってそもそも地域の歴史とか文化や自然を伝えていく、土地の記憶を未来に残していくものだと思うんですが、単に古いものを残して守っているだけじゃなくて、昔のことから学んで、そこから得られる教えだったり、こうしたほうが良かったという反面教師も含めて未来を考えるための材料にするためでもあると思うんですね。それで博物館・美術館が震災後の福島で役に立っているのの一つが、今の福島を考える時に役に立つような過去の事例をみなさんと学び直しながら、福島の歴史を学び直しながら、福島のことを考えていくことだと思っています。そんな活動をしている中で、昨年度、私たち

では板橋さんからどうぞよろしく願っています。  
**講演1**  
**「只見川電源開発と生活工芸運動」**  
 板橋淳也

みなさん、おばんでございます。会津ではこんばんはを「おばんでございます」と言います。会津弁で喋らせていただきます。

### 違うところに来たというより、地元に来たというよう

私、今日実は初めて川内村に入りました。震災後に福島県で県内の町村の合同チームをつくりたいというのがあって、川内村さんとはそれ以来、福島県で一緒にチームでお世話になってます。今年も先週、川内村さんと一緒に大会に出させていたいただいて。感謝申し上げます。いなと思っております。駅伝の時に川内村のスポーツ推進担当の人に、「再来週、川内行くんですけど、どのぐらいかかるんですか」と聞いていたら、「福島からだ約2時間だ」というから、じゃあうちとそんなに変わらないです。ねなんて言いながら、今日来たんですけども、すごく雰囲気やうちの方に似ているなと思いました。うちの隣町に昭和村というところがあるんですけど、昭和村さんと雰囲気似ていて、なんかこう違うところに来たというより、地元に来たというように感じます。そういう印象がありました。

午後、川内の色々な方にお話を聞いたんです

の博物館がある会津若松市からさらに新潟寄りの奥会津と呼ばれるエリアでお話を聞くことがありました。こちらに来ていただきました三島町の板橋さん、そして金山町で活動されていた榎本さんからもお話を聞きました。お二人からお聞きしたお話は、奥会津が数十年前、ほんのつい最近の歴史の中で課題に向き合ってきた選んだ選択を教えてくれるものでした。奥会津の選択を私たちが学び直すことで今の福島のことを考えられるんじゃないかなと思います。

それを共有する場所として、なぜ川内を選ばせていただいたかといいますと、川内で行っているプロジェクトに最近何回かお邪魔させていただく中で、川内も奥会津と近い山の暮らしを、特に2016年に戻ってこられてから大事にしてこられているのを知って、ぜひ奥会津の歴史を川内のみなさんと学び直して考えていきたいと思います。

そんなスタートがありました。数週間前、11月の初めに奥会津で小さいミュージアムをめぐるツアーを、今日会場にお越しいただいた井出寿一さんに来ていただいて、奥会津で川内のことも教えていただくツアーを行ってきました。川内のことを奥会津で聞いたツアーと双子のような形で、今日はここ川内にお邪魔させていただきます。ただ形をとりました。

私は県立博物館の仕事として2011年から被災地で活動してきましたが、ちょっと不安を持ちながら来ていました、いつも。こんなことをして余計なことなんじゃないのだろうか、かえってお邪魔になっちゃうんじゃないだろうか。そんな心配を持ちながら浜通りに来て、浜通りのみなさんがどんなことを考

けど、結論を先に言っちゃいますと、どこの町もみんな同じ思いで一所懸命やられているんだなと思いました。私がこれから話す内容は川内村の人たちも同じことを思っていることだと思えますので、あまり参考にならない話じゃないのかもしれませんが、お話しさせていただきます。と思います。

### 三島町がどんなところか

うちは奥会津の編み組細工、生活工芸運動というのが一つのポイントです。うちの町の振興計画が今第4次なんですけども、第1次振興計画から生活工芸運動というのは町のシンボル事業の一つとして載っていて、今も変わらず続いています。この建物が生活工芸館という町の拠点の施設です。私9月までこの館長をしていました。4年半、ここで館長をさ



せていただいたんですけども、職員が2人いて、みなさんがものづくりをしたりとか、材料を準備したりとか、そういう活動をしている施設で、一つの独立組織になっております。植林の中にぽつんと建っています、こういうところで仕事をしていました。

三島町がどんなところかなって、たぶんみなさん行ったことないと思いますが、福島県の地図で見ますとこの赤い印、ここが三島町です。会津若松から車でだいたい1時間くらい奥に入ります。只見川の両脇に集落が18あって、人口は1,602人。11月1日現在で1,602人です。高齢化率は51.4%。県内の高齢化率は、1位は金山さんかな、今、隣の金山町が1位、2位が昭和村、3位が三島町。高齢化率の1位2位3位を、ここで占めているということになっております。写真が左下にもあり

私たちが  
大切なこと

オープンディスカッション



和49年にポーンって一面に出たんですね。それなら3日3晩役場の電話止まらなかったそうです。ずっと電話鳴りっぱなしで。一時期は5,000人ぐらいの人に会員になっていただいていたんです。未だにうちの町でやっています。年費1万円です。その1万円は1世帯家族全員で1万円なんです。うちの町に来ていただくとして町民と同じ扱いになります。だから温泉入るのも特別町民なので町民料金、すべて町民扱いになる。町民が無料だった特別町民も無料。当時は民泊しました。高齢者2人で生活しているようなお爺ちゃんお婆ちゃんたちが協力してくれて民泊した。そこに「お帰りの」「ただいま」という感じで帰ってくるわけですね、夏になると。そういう繋がりを持った。

こういうメンバーの中に必ず色々な人がいるんですね。例えば大学の先生がいたり、彫刻家の先生がいたり。町の狙いとしては、この町どうしたらいいでしょうっていうことをみんな喋ってもらって機会をつくるっていうのが、ふるさと運動の裏の策です。おかげで世代が変わって、当時一番小さいお子さんだったのが、今は60歳ぐらいになって懐かしいなって言って、またその次のお孫さんたちともお付き合いをしているところがあります。そういう繋がりがあるところが、その中から他の四つの運動が始まりました。

大事なことは、生活工芸運動はもちろん、そういうものづくりですね。もう一つの運動は有機農業運動。昔ながらの農業をやっていることよってということで、最先端じゃなくてうちはうちの町の昔の農業をやっていること。もう一つは健康づくり運動。今日もね、川内村の人たち

の方も97歳で今年の1月に亡くなられちゃったんですけど、亡くなるまでもものづくりを一所懸命やられていて、親の代からずっと引き継がれてきたものを後継者に教えていった方です。

### 昔からやっていたことを

ヒロロっていう葉っぱでもつくるんですけど、こういったものを今風のデザインに変えたりしています。ヒロロっていうのは、こういう緑色のびよびよって生えてる葉っぱ。ミヤマカンスゲっていう学名ですけど、スゲです。この葉っぱを9月の二十日になったら取って、乾燥させるんですね。それを縄状にして、縄糸にして、バッグの骨組みをつくっていくわけですね、編んで。手作業ですべてやります。取

### 奥会津編み組細工「ヒロロ細工」



ヒロロ(ミヤマカンスゲ)

### 奥会津編み組細工「ヒロロ細工」



### 奥会津編み組細工「山ブドウ細工」

【山ブドウ細工】  
材料となる山ブドウの皮は、栗の花の咲く6月頃に採取する一枚皮が原材料とされます。材料が強靱であり、用途により異なった編みの技法により、手さげ籠・抱え籠・菓子器などが作られます。



昭和56年から生活工芸運動を始めました。最初は高齢者経済になるだろうと。お年寄りが昔ながらの知恵と技を持つてくるんだから、これを活かそうじゃないかっていうことで始めました。最初はお猪口1杯のお酒代にもなるように頑張りましょうよって言いながら、みんなで始めて年数を重ねた。これまたタビなんですけども、うちは雪国なので竹はあるけども冬になるとぐにゃーって曲がっちゃって立派な竹がないので、昔の人たちの知恵なんですよ、マタタビって猫が好きなマタタビの蔓ですね、それを採って。今、時期で採ってるんですよ、今本気なんです、マ

### お猪口1杯のお酒代

このバッグだいたい7万円ぐらいですね。ちよっと大きいやつです。普通のサイズですとだいたい5万円ぐらいから。ちよちよ財布みたいな、これはだいたい2万円、2万2,000円ぐらいですね。かこみたいな、あれはおにぎり入れなんですけど、昔はそこにトマトとか、野菜を入れて山の中に持っていくんですね。そして山の中の流れている川にぶっこんでおく。そうして冷やしてキュウリ食ったりとか。そういったものが、今おにぎり入れになってますけど、これだいたい7,000、8,000円ぐらいですね。

### 参加者A

ちなみにいくらぐらいするんですか。

ものすごく人気ですね、今。

### 必ず生活の中で使うものを

山ぶどうで作ったスカリっていう、これは昔、林業で鋭い鉋とか大きなこぎりとかを背負って持っていくわけです、そのために使ったものなんです。山ぶどうで作っています。その技術で現代にあったものをつくるという取り組みを生活工芸館で研究して、デザインを開発してる。ただつくっている技術、技、それは昔と同じです。先代から受け継いだ技術を使っ

るのにも伝統的な技があって、単純に根っ子取っちゃうと生えなくなっちゃうから、取る時は必ず根っ子を押さえてびよって引く張る。そうするとまた来年生えてくる。こうやって一つ一つ編んでいくんですね。この横軸はシナノキの内側の繊維を使っています。うちで言うところモワダって方言です。これはシナノキをバシッと切って、6月頃ですね、皮を剥ぎとります。皮を水槽の中に1ヶ月間ぶち込んでおきます。そうすると皮が腐ってきます。腐ってくると内側から黄色い透명한繊維がいつか取れてくるんですけど、それを綺麗な川で夏に洗って、乾燥させる。それを色付けのために横軸に使っているということです。こういった技を、昔からやっていたことを、いまだに続けています。

の話で健康が大事だっているのが出ましたけど、やっぱり健康じゃないと楽しく生活できないじゃないのっていうことで健康づくり。あと一つは地区プライド運動。この地区プライドっていうのは、村の中、地区の中には必ず自慢するものがあるよねって、それを大事にしましょうよって。例えばうちの町では1月15日にサノカミっていう、この辺ではどんと焼きって思うんですけど、小正月にみんなサイノカミって立てるんですね。それで火をかけるんですが、そういう昔ながらの伝統行事を大事にしたりっていう地区プライド運動を入れた五つの運動。これはいまだにやっています。これが第4次になってもいまだに町の振興計画の基本です。

### 小林

30年、40年やってらっしゃる。

### 板橋

そうですね。もう30年40年。生活工芸運動というのはいまだに健在だという状態でやっています。

だからボンドとかは一切使わない。生活工芸品という言葉がこの町で生まれて。今は全国的に使いますが、生活工芸という言葉が出たのはこの町じゃないかって言われています。民芸と工芸という言葉があるんですけど、民芸っていうのはどっちかというところと美術的な要素があったりとか、そういうことを言う。工芸っていうのは正しく生活の中で使うものっていうことではないってあるんですけども、あえてうちは生活工芸という言葉を使った。それはなぜかというところ、ものをつくる時は必ず生活の中で使うものをつくりましょうっていうルールをつくったからですね。昔はみんな生活するためにものをつくっていたんだから、生活するためのものをつくっていきましようっていうことがうちの原点なんです。だからバッグだって今の女性が持つて歩けるような形にして、使いやすいうようにしましようってものづくりをした。これが生活工芸運動の原点です。これが昭和56年からスタートしたんですが、平成15年に国の伝統的工芸品の指定を受けることができました。この時はすごく異例でして、それまで伝統的工芸品っていうのは幕府とかそういう時代の経済の発展のためにものづくりをさせたというものが伝統的工芸品になったんですけど、そうじゃなくて生活の中で日常的に使うものが伝統的工芸品になった。これは全国で初めてでした。これができたことよって今ではアイヌ民族のものも伝統的工芸品になっています。204番目にうちのものがなりましたが、こういったものが伝統的工芸品の指定を受けることができました。今では伝統工芸士さんが9名います、高齢者もものづくりをやっています。今映っている写真

### <生活工芸運動>

(例)山で使用していた山ブドウ皮でつくったスカリ(背負い籠)を町中で使用できるバッグに(デザイン開発)



⇒民具を現代風にアレンジ

### 経済産業大臣指定伝統工芸品「奥会津編み組細工」

【平成12年】生活工芸運動友の会を発足。奥会津編み組細工をはじめとする生活工芸品の販売窓口として生活工芸館内に事務局を置く。三島町の生活工芸品の伝統工芸品指定を目指す。会員数150名(平成29年現在)

【平成15年】ヤマブドウ細工、ヒロロ細工、マタタビ細工の三種類が「奥会津編み組細工」として経済産業大臣指定伝統工芸品となる。産地として「奥会津三島編み組振興協議会」を発足。

【平成16年】奥会津編み組細工の伝統工芸士第1号「長瀬千代喜」

【平成17年~20年】伝統工芸士が5名となる

【平成23年】伝統工芸士が新たに3名(全員70歳以上)

【平成28年】伝統工芸士が新たに2名



伝統工芸士は青木基重さんはじめ全部で9名  
ヒロロ細工2名  
山ブドウ細工5名  
マタタビ細工2名

## 奥会津編み組細工「マタタビ細工」



【マタタビ細工】  
一本の蔓から伸びる肉厚の成熟した1m～3mの枝を材料とし、主に炊事用具として用いられます。水切れが良いことに加え、水分を含んだ材料はしなやかで手を傷つけることが少ないのが特徴です。用途により異なった編みの技法が用いられます。

**榎本**  
金山町のブースを三島さんの「工人まつり」で出させてもらったり。

**板橋**  
ええ。凄く綺麗なのつくるんです、実は。

**榎本**  
金山の人はマタタビだったら三島に負けな  
いと云ってますね。

**板橋**  
金山は最先端いってるんですよ。円周率  
まで計算して、何cm何cmやってる。確かに  
本当に見事です。だけど榎本さんにちよつと  
失礼かもしれないけど、うちの伝統工芸士さ  
んが言うには、「いや確かに綺麗だ、金山の見  
事だ。だけどこうやって手探りで一生懸命に  
つくって、丸っこいざるができたならこんなに嬉  
しいことねえべした」。ここがものづくりの原  
点なんです。ここがものづくりの原点なん  
です。そこがちよつと違うところですね。

「工人まつり」は生活工芸運動から始まって  
るんですが、今だいたい毎年2日間やるんです  
けど、2万人超えます。今年は2万3000  
人が集まりました。三島町は渋滞することが  
ないんですよ、こういうところですから。こ  
の日はだけ渋滞ができます。だからお年寄り  
たち、お猪口1杯の酒って言うたのが、今は  
孫に車を1台買ってやるかっていうぐらいの  
お金を稼ぐ人もいます。山ぶどうのバッグを  
つくってるお年寄りたち、冬に一所懸命つく  
りますが、だいたい10個とか15個ぐらいしか  
いぜい大きいのはつくれないです。工人まつ

出版されました「村の肖像」プロジェクトの  
本のチラシもお配りしていますので、そちら  
もご覧になりながらお聞きいただければと思  
います。よろしくお願いたします。

### 講演2

## 「へかねやま」村の肖像「プロジェクト」 に学ぶ山の幸」

### 榎本千賀子

こんばんは、みなさん。私は会津出身では  
ありませんので、板橋さんとは違って、会津弁は、  
まだ外国語のままと感じるで喋れません。ただ、  
私が住んでいた大志という金山の集落の人に最近、  
「榎本さんは大志の人みたいな話し方するな」  
と言われました。金山の人と一緒にいると時々  
会津弁が出ることもあるようですが、まだ目  
の前にその人たちがいないと話せないようです。

## 金山「村の肖像」プロジェクト

今日は、私が2016年から取り組んでいる  
金山「村の肖像」プロジェクトについてご紹介  
したいと思います。私がプロジェクトを行い、  
そして3年間住んでいたのは、大沼郡金山町と  
いうところです。三島町のお隣の町です。人  
口は約2,000人。ついこの間どうやら2、  
000人を切ってしまったという話を聞いた  
ところ。高齢化率は約58%です。町内には  
ダムが五つあって、三島と同じく電源開発の  
町です。そして、近隣の奥会津の町村と共通の  
課題、つまり高齢化と過疎化に直面しています。  
三島町さんよりもほんの少し雪が多いところ

りの時に、1個だけ残ってるのがあって、値段  
見たら120万って書いてあるんですよ。何  
でそんな高いの売ってるのって言ったら、い  
やこれ俺の昨日の売上げ現金入ってるんだっ  
て。こんな感じで林の中でやっています。ぜ  
ひ見に来てください。

室内のイベントもやっています。たださっき  
金山さんの話もしましたけど決して三島町に  
こだわっていません。会津は一つだと思っ  
ています。この文化っていうのはうちの町だけ  
のじゃないんです。あとで榎本さんの写真の  
説明にもあると思うんですけど、これは奥会  
津の文化なんです。奥会津の文化なので、近隣  
町村にも情報提供して、一緒にやっています。

## どうにかしてこの町を

最後にまとめていくんですけど、今日川内村  
さんの話を聞いて、川内村さんとうちの町似  
てるなと思いました。考えること同じなんだ  
なと思って。川内村さんも一時期全村避難して、  
それからいち早く帰村宣言して、今は8割ぐ  
らいの人が戻ってきてるって聞いて、はつきり言  
って私びっくりしてんです。

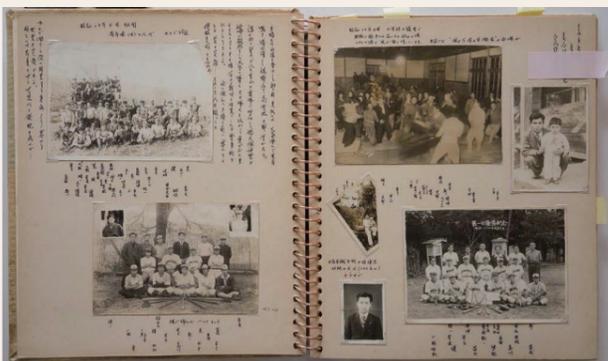
「どうにかしてこの町を、何とかしてこの町  
を」って、うちの町もずっと思ってるんです。  
奥会津からすれば、うちの町はずっとそう思っ  
てるんだよ、思ってやってるんだよっていうの  
が本音です。うちの町もみなさんと同じ考えで、  
どうやってこの町残して、地域づくりやったら  
いいかなっていうことで取り組んでいます。

生活工芸村構想というのも立ち上げました。  
全国から生活工芸運動に興味のある人、うち  
の町に移り住んで一緒に生活しませんかって、

です。

私が取り組んできた「金山町の肖像」プロジェ  
クト」とは、一口で説明しますと、金山町で撮  
影されてきた、あるいは保存されてきた写真  
を中心とする地域の映像資料を対象として、収  
集、調査、保存、活用を目指す、そういう取り組  
みです。

このプロジェクトで収集の中心となってきた  
のは、多くの「家庭に当たり前にある家族ア  
ルバムです。これは1946年以降に渡部章  
榮さんという方がまとめたアルバムなんです  
けれども、丁寧に写真の横にも裏にもびっしり  
文章が書かれた、非常に手の込んだアルバムです。  
このような、金山町の人々が生活の中から生み  
出してきた映像資料を通して、まずは町民自  
身の視点から町の歴史と文化を学んでみよう、  
振り返ってみようということを行ってきました。



家族アルバム  
(渡部章榮 1946年以降のアルバム)

### 中心となる資料

## 映像資料を通して...

- ・ 町民自身の視点から町の歴史と文化を学ぶ
- ・ 文字化されてこなかった町民の記憶を振り返る
- ・ 町民自身が町をどのように表現してきたのかを知る



索道の作業員たち  
本名(三条) 1950年代後半

教育・文化・町づくりへの貢献

## オープンディスカッション

私たちが  
大切にしたいこと



町民と描く「村の肖像」ワークショップ



町民と描く「村の肖像」プロジェクトへの参加



町民と描く「村の肖像」展覧会（2019年10月12日～14日@画廊パンブキン）

教育、文化、まちづくりには何がしかの貢献がでないか。さらには映像資料をそのような活動に活かすことができるんじゃないかと考えているのです。金山町には、町の生活の核になるものがないかということを考え直して、いくという点で、他の周辺町村に比べて後れをとってしまった部分があります。三島町の三島フォーラムのような取り組みを、少し遅れて、今写真を手掛かりに行っているとも言えるかもしれません。

例えば、金山町には、三条という廃村になった集落があるんですけども、その三条集落の奥には、三条杉と呼ばれる大きな杉が自生していました。非常に高価な杉ですが、この写真は、それを下ろしてくる索道の作業員たちの休み時間を作業員自身が撮った写真です。

あとはお喋りをしてもらって、その会話のなかで資料についてわかったことが何かあれば記録するということをしていました。右下の写真は、ワークショップで来場者の方に写真について知っていることや思い出を書いてもらっているところです。

このワークショップは、町内の各地区を回りながら実施していきまされたけれども、その他にも様々な形で町の人たちに協力してもらいました。右上の写真はそうした協力の一例、資料の持ち主の方や撮影者の方、関係者の方への個別の聞き取りの様子です。

また、左の写真は公開編集室という先ほどお話ししたもう一つのプロジェクトでの取り組みです。2019年3月にプロジェクトの中間報告として写真集を作ったんですけども、公開編集室は、その編集の過程で私がつくった原稿を見てもいい、それに対して住民の方から、ここはもっとこうしたいほうがいいんじゃないかとか、こういう章立てで本当にいいのとかか、いろんな意見をもらう場でした。先程のワークショップは高齢者の方の参加が多いんですけども、この編集室は夜の開催ということもあって、比較的若い方に集まってもらうことができました。

加えて、これまで何回か、新潟、長岡、もちろん金山町でも何度か展覧会を行っています。これは、私がプロジェクトを行いながら自分自身で撮影してきた写真と「村の肖像」で集めた写真のスライドショーと、それから「村の肖像」の過程で生まれてきた資料と一緒に展示をしたものです。

そしてこうした活動全ての成果として、中間報告として2019年3月にこの写真集を発

こうした資料を通じて、町の生活を考え直しているということです。

実際にどういうふうなプロジェクトを進めてきたのかということなんですけれども、まずは資料収集調査報告を兼ねたワークショップを実施しました。これは後でご説明します。さらにプロジェクトの成果を写真集の形にまとめる際には、住民に自由に参加してもらえ公開編集室というものを開催しました。これも後でお見せします。さらに、これらの住民にも参加してもらった活動と並行して、長期的

そして多角的な資料の活用を目指した資料のデジタル化と目録作成にあたりました。また活動に際しては、資料を様々な形で、例えば展覧会だとか、簡易的な冊子にまとめるといった形で、中間報告として町の内外に発信すること

行することができました。写真集についてはチラシを見ていただければと思います。写真集は金山町の教育委員会で通信販売もしております。

### 自然環境と結びついた暮らし

ここからは、写真とこのプロジェクトに参加してくれた方々の言葉から見えてきた、金山の暮らしがどのようなものであったのか、その暮らしの中で人々の幸せがどのようなものであったと考えられるのか、そうしたことを写真を見ていただきながらお話ししたいと思います。

先ほど、川内村の方々に話を聞いたんですけども、金山で聞く話と共通するところが多いなと感じました。私は東京生まれで、金山に



自然環境と結びついた暮らし

ソリを利用しての材木運搬／玉梨 1957年



自然環境と結びついた暮らし

ヒメマス地引網漁／沼沢 1932年10月

も折に触れて行ってきました。全体として、町民と一緒に取り組む、つまり住民と協働するということが、そこからわかったことや得られた資料をその途中経過も含めて共有すること、そのことによってプロジェクトは進展してきた、そして町に定着してきたのだと私は評価しています。

これが実際のワークショップの様子です。簡単に説明すると、役場から会場に移動式のパネルを持って行って、集めた写真の複製を簡単に貼って貼って、簡単な説明も少し添えて、それを見ながらみんなで気楽にお喋りをするという内容のワークショップです。スライド右の写真にあるように、プロジェクトの説明をしたり、当日持ち込まれた資料をみんなで見たり見たり見たりということをしな

暮らしまでは山間地の暮らしを全然知らないままに過ごしていました。けれども今では、金山に残るような暮らしが日本全国にあり、その多くが、今現在危機に瀕しているんだなと実感することが多くなりました。

まず金山町の肖像プロジェクトに集まってきた写真から改めて見えてくるのは、金山の暮らしが自然環境と結びついた暮らしであるということですね。これは川内村でももちろんそうだったと思いますし、奥会津の三島さんを始め周辺町村、みんなそうだと思うんですけども、自然のあり方に即した暮らしが長らく続いてきたのだと思います。この写真は春の頃に行われる、そり出しと呼ばれる材木の運搬の様子です。雪を使えばそりで重い木を運び出せますから、雪が少し溶けて固くしま

春頃に山から材木を出すんです。これも山の恵みを自然に即して利用する工夫の一つですね。

小林 楽しそう。

榎本 そう、こうした作業は楽しそうなんですよね、本当に。また、これは、金山町の沼沢湖というカルデラ湖、非常に水が綺麗で水温が低い湖があるんですけども、そこでのヒメマス養殖の写真です。沼沢湖では福島県で唯一ヒメマスを養殖しているのですが、その様子ですね。ヒメマスを導入したのも金山の人ですが、自分たちの環境にあったものを見つけて出して、もう100年ぐらい取り組んでいるんです。

小林 原発事故後、数年間出荷停止でしたね。

榎本 はい。ヒメマスも禁漁になりました。しかし、禁漁の間も漁協の人たちが、捕ることはできないとわかっているんですけども、稚魚の放流を続けて、ヒメマスを保護しました。魚が再開したのは2年前だったかな、今はまた捕れるようになりまし

た。稚魚の放流には町内の子どもたちも参加しています。このように、金山の人々は水資源をうまく利用してきました。自然の恵みを工夫しながら利用する暮らしが、金山の、奥会津の、そして山間地の暮らしの基本だったのだと思います。

### 自給自足的な自然と

オープンディスカッション

私たちが大切なこと



上田発電所建設工事／沼沢  
1952-1954年



開発や災害による地域の変化



水害・玉梨の被害／玉梨  
1969年

開発や災害による地域の変化

## 結びついた生活が

さて、戦後そうした生活は大きく変わります。先程の三島さんの電源開発の話というのもそうです、川内村はまだ今その変化の渦中にあるんだと思いますけれども、長らく続いてきた自然と結びついた暮らしは戦後大きく変わってしまったのです。

これは上田発電所という、1952年着工、54年完成の金山にある水力発電ダム建設中の写真です。右がおそらくは工事会社が撮ったオフィシャルな写真、左は工事建設現場で働いていた人たちが撮ったアンオフィシャルな写真です。様々な立場から金山に変化をもたらしたダム工事の様子を撮ったものがプロジェクトには集まってきたんですが、その対照的な二つを並べてみます。

右の写真を見ると、川が流れていて、写真の右上のほうに柵田が映っているんですね。この柵田はダム完成後に沈んでしまったんですけれども、只見川の河岸段丘には柵田がずいぶん広がっていたんです。金山では集落全部が水に沈むということはほぼなかったんですけれども、家によっては移転を余儀なくされたり、多くの人が田畑を失うことになりました。金山町は三島と同じで耕作地の狭いところなんですけれども急峻な地形ですので、水を引くにしてもなかなか難しい。この集落では、1.3kmにおよぶ水路を江戸時代に手掘りで掘ったそうです。金山の人々は、そのように苦勞しながら開墾した苦勞のじんだ土地を手放さなくてはならなかったのです。さらに、ここにも鮭などが遡って来ていて、川沿いの住人はそれを獲って食べていたわけですが、そうした魚

の遡上もダムができればなくなってしまうので、できることで生業の一部が失われてしまうのです。

一方で左は金山の女性たち、中学を出たばかりの10代の女の子たちを写した写真です。こういう子たちも含めて、町の人たちがたくさんこのダム建設現場で働いたわけです。そして、ここで働くことで、金山の人たちは、それまでにはなかった現金収入を得られるようになりました。

これらの良いこと悪いことが全部相まって、自給自足的な自然と結びついた生活が否応なく変わっていきます。また、人口も急激に変動していくわけです。さらには、先ほど板橋さんの話にも2011年の水害の話がありましたが、これも1969年の水害の写真ですけども、自然災害をきっかけとしても地域は変化していくわけです。これは玉梨の野尻川という只見川の支流の、さらに支流の川に繋がりが、この水害はその後の大規模な河川整備に繋がりが、その河川整備によってその後水害は起きにくくなっていきますけれども、その流域で暮らしていた人たちの親しみある風景を変えることで、川と人の関係も変化させていきます。

非常に印象深い話を聞いたことがあります。水害前の野尻川流域には大きな巨石がゴロゴロした風景があったんだそうですけれども、その巨石が流木をせき止めてしまった大氾濫が起きたそうです。その石は地域の人々の信仰を集めていて、一部に梵字が彫られた石もあったそうです。しかし、その石が水害を引き起こした一因でもありましたので、河川整備の際には発破で爆破することになったのです。そ

## 自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく

これは野尻川沿いに住んでいた人々には耐え難いことであつたけれど、水害が起きて大きな被害が起きたがゆえに発破も仕方がないということになった。しかしそれでも一部の人は、発破の音を聞くのが忍びないと、蒲団を被って爆破時を耐えていたという話です。金山町で起こったのは、そういった変化です。町の人々は、単に生活の仕方が変わるといっただけでなく、精神的なものにも大きな変化をもたらすような経験をしているわけです。

こうした変化は、経済や安全など、色々なものが結びついた非常に複雑な利害関係のものといえるもので、何が良かったのかということを一口に言うことができない、とても評価の難しい変化です。ダムのこと言えば、2011年の水害はダムにも責任があるのではないかと、今に繋がるような問題でもあります。しかし、困難も多いのですが、同時に写真から見えてくるのは、このように暮らしが変化していく中でも変わらず大切にされてきた多くの幸いがあります。私には、水害の写真であるとか、ダムの写真からも、ここに暮らすことの大きな喜びが見えてくるように思えます。それは一言で言えば、自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく喜びとも呼ぶべきものです。

例えば左の写真は、ウサギを解体しているところなんですけども、後ろの子どもが非常に嬉しそうにしているんですね。このように食



うさぎの解体／玉梨／1965年  
芝刈り中の休憩／大蔵／1950年代後半

自らの暮らしを自ら作る喜び



べ物を自分の力で調達することがその喜びの一例です。また、右は芝刈り中の休憩ですが、これもまた、皆でお茶を飲む、非常に楽しい時間だったようです。女性も男性も自分の力を発揮して燃料を手に入れる。それはすくく大変なことでもあると思うんですけども、皆で集まって賑やかだし、達成感もやりがいもあるような、そして自分がその村の生活に必要とされていることを実感できるような、そういう楽しさがあったんじゃないかなと思います。これは親戚一同集まったの田植えの様子です。金山は機械が入らないような田植えが多かったので人力が大事なわけです。そこに貢献できているということが誇らしくもあるんだろうなと思います。

## ヤマのないところでは暮らせない

次にお見せするのは実はダムと関連した写真です。これはさっきの写真に写っていた柵田を失ったダム上流の中川という集落の人たちが、失われた農地の代わりに上野と呼ばれるところに畑と栗林を開拓した、その時の写真です。彼らは補償金を活用して生業を新たにつくろうとしました。寒冷な自分たちの環境に合った栗栽培に集落挙げて取り組んだのです。自分たちの生活を自分たちで立て直すことは、大変なことではあったと思うんですけども、彼らはそこに希望を見出していったのだらうと、この写真を見ていると思います。

親戚一同での田植え／玉梨  
1950年代前半



自らの暮らしを自ら作る喜び



上野開拓／中川  
1960年頃

自らの暮らしを自ら作る喜び



私たちが大切なこと  
オープンディスカッション



出征兵士のための芝居／滝沢／1941年  
バンド演奏／本名／1955年

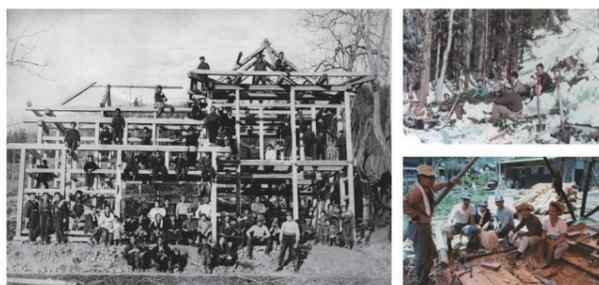


自らの暮らしを自ら作る喜び



自らの暮らしを自ら作る喜び

団伊裏を囲む人々／下大牧  
1958年



自らの暮らしを自ら作る喜び

建前の祝い／大志／1943年  
家を建てる／横田／1973年

# 私たちが大切にしたいこと

オープンディスカッション

が提供した木で建てられているということですが、左の写真は私が今も金山で借りているお家の写真です。これを建てた時のことを覚えてらっしゃる方がお隣に住んでいて、村総出で建てたということをお話していただきました。右の写真は70年代の写真です。木を伐るところから、それから会津では棟木のところに火伏せという男性と女性のシンボルを飾りますけれども、それを同級生がみんなで作っていました。暮らしてみんなでつくっていく。そのこと自身が、すごく誇らしいことであるし、喜びであるのではないのでしょうか。これらの写真に写る人々の姿、これらの写真を写し、残そうとしてきた人々の行動と言葉から、私はそういうことを学んでいます。

女たちにとって、心から楽しい遊びとしての側面を持つのだと思います。大変なことである一方で遊びでもあるような、そういう暮らしが金山町では営まれてきたのだと思います。実際、生活の中に自らより直接的な楽しみをつくっていくことにも金山の人たちは非常に長けていると思います。左の写真は戦前のお芝居の様子ですね。右は演芸会でのバンド演奏です。これは自分たちでつくったどぶろくをみんなで飲んでるところです。

金山の人はこの町には娯楽がないとしばしば言います。しかし、私はこれを謙遜だと思えます。本当はここにこそ、自分たちだけの娯楽があるように思います。そして冠婚葬祭も自分たちで取り仕切り、家も自分でつくるなど、生活全般の主導権を自分たちの手に握っておくこと。この天山文庫も川内村の人たち

とはいえ、プロジェクトから学んだこと

## 「川内と奥会津 私たちが大切にしたいこと」

天野和彦

じゃあここからの時間は、私がモデレーターをさせていただきます。天野と言います、よろしくお願います。今日はお二人のお話を伺って、みなさんがたもどういふうに感じられたでしょうかね。もうちょっとお二人にお話を伺いながら、さらに深掘りをしていく時間にしていきたくと思っています。それでちょっとね、キーワードがいっぱい出てきたので。例えば「不便」。不便っていったいどういうことなのかとかね。それから「幸せ感」「幸せの形」という言葉も出てきました。「持続可能な地域」というのも出てきました。そもそもそれぞれの地域で危機感があつたんですね。これはちょっとやばいなと。さっきの板橋さんの話でもありましたけど、このままでと町がなくなっていくんじゃないのってこと。あるいは金山にしてもダム建設の中で原風景がなくなっていく、暮らしが変わっていく。私自身の感想ですけど、ちょうど日本の経済構造が変わっていくわけですよ。昭和30年代から40年代にかけてのエネルギー革命。そのことによって日本そのものが大きく変化していった。これ川内村も例外ではないですよ。木炭の生産日本一で住民税もかからなかった。その地域がですね、もう石炭も木炭もいらなくなって言われて。その結果何に変わっていったか。日本のエネルギー政策も変わっていった中で。そこから約50年か60年くらい経って、こういう事態に我々巻き込まれてしまったわけですよ。福島県なんか特にね。翻弄されてきた

日本全体の姿がそこにあった。三島もそう、金山もそう、川内も日本の経済構造の変化によって翻弄されてきたんだということが本当によくわかった。ご報告だったと思います。

## 何を大切にしてきたのか

その上で伺いたいなと思ったのは、今日は何を大切にしてきたのかなっていうお話なんです。テーマがそこなんです。何を大切にしてきたのか。ターニングポイントっていうのがあったと思うんです、それぞれ。例えば三島町であれば、昭和40年代に電源開発で、000人以上いた住民が一気にいなくなつて、このままだと町がなくなるっていう危機感の中で、リゾート開発に対してノーって答えた。あれが大きなターニングポイントだったと思うわけです。板橋さん、当時の町の人たちはあの時になぜノーと言ったのか。そしてその結果に対して今町の人たちはどういふうに思っていると思いますか。

板橋

当時、大学の先生たちとかいろんな人に来てもらって、どうしたらいいでしょうかねっていう話をした時があって、大学の先生たちはリゾート開発をすることによって雇用の場も増える、人もいっぱい入ってくる、観光客も増えてくる、経済効果も高まるっていうことだったんです。ノーって言ったときだけは、電源開発をしたことによって理想としたことと現実が逆になってたんですよ。そこでですね、一番は。結局同じことになるんじゃないの、人任せて町を良くするよりは自分の町のこと

を、すぐに町の課題に役立てられるかというところ、これはもちろんなかなか難しいことです。ただ私は、きつとこの中に金山が大事にしているべきことがあるんだろうなと思っています。そして、子どもたちや町の人たちと一緒に、これからどういふうにこれらの写真が教えてくれたことを役に立てていけるのかを考えていきたいなと思っています。どうもありがとうございます。

小林

ありがとうございます。これから後半のディスカッションに入ります。では天野さんよろしくお願います。

## オープンディスカッション

は住んでいる人しか知らないんだから、自分たちで考えたほうがいいんじゃないのかっていう答えが一番大きかった。それでノーっていう答えだったんだと思うんです。

天野

その選択は間違ってたんですか、間違ってたんですか。

板橋

うちの町としてはいまだにそれは間違っていないって思っています。誇りに思っています。

天野

そういう選択が誇りだと今思ってるってことね、町民の人たちが。榎本さん、金山で、原風景がなくなっていく、でもそれは現金収入を初めてたくさん得ることができた、そういうチャンスだったとおっしゃっています。町の人たちはそのことについてノスタルジックな思いはもちろんあるだろうけれども、そこを越えたところで、その選択っていうのはどうだったと考えるらっしゃるんでしょうね。それは榎本さんのお考えで結構です。

榎本

それはとても難しいことです。一方で現金収入を得て、子どもたちに教育を与えるなどできたので、そういうところではとても良かったと素直に思っている人が多いのではないのでしょうか。ただ、金山は五つもダムがあって、それが長い時間をかけて建設されていくんですね。さらには金山は田子倉のダムの基地にもなっていましたので、金山は周辺の

町村に比べると、非常に長い間、ダムで潤った時間があるんです。そのため、金山では農業なんかやらないで仕事に出るとか、農業なんかやらないでいいんだという時間がとても長かったと振り返ってお話される方が多いんです。三島や昭和の人たちはその間もきつと過去の農業中心の生活を伝えてきたのに、金山ではそうしたことができなかった。そのことが今思えば良くなかったという言葉を、比較的若い金山の人からよく聞くのです。

これらは、むしろ教育を受けるなど、恩恵を受けた側の人たちの言葉です。親の世代がダムで働いてお金を得て、それによって教育を得ることができた人たちが振り返ってそういうことを言っている。もちろん彼らもダム開発を否定しているわけではないんですけども、ただその間にかつての生活をすっかり忘れてしまったことについては、良くないことだと思います。たかもしれないと今になって言っている人はとても多いです。

天野

なるほど。その選択は、誤りまではいかないけど、もしかすると多くのものを失うことに繋がっていったのではないかとこのように懐疑的に思っている方もいらっしゃるということですね。

榎本

そうですね。その時にはわからなかったんだけど、やはり大事なことだったのだらうと。伝え続けていかなければ切れてしまうもの、消えてしまうものがあるんだということに、今の金山の人たちは敏感になっています。そのこ

とが、「この金山」村の肖像」プロジェクトをやっ  
ていく上でも、いろいろな人が協力してくれた  
原動力になっているのかもしれない。

## なぜ残そうとしたのか

天野

なるほど。どんどん踏み込んでいきたいと  
思うんです。先ほど「持続可能な地域」、ある  
いは「ふるさと」というような言葉も何度も  
出てきて。あとで川内の方々にもお聞きした  
いと思うんですけど、持続可能な地域を作る必  
要があるんですか。もっと言うと、なくなっ  
て困るんですか、ふるさとが。どうなんです  
かね。危機感があって、その危機感に一所懸  
命立ち上がったんですよ。なぜ立ち上がる必  
要があったんですか。そのままなくなるって  
いう選択だっただけはなかったわけじゃない  
ですか。なぜそれを残そうとしたのか。当時  
の先輩たちですよ。住民の方々。なぜその  
地域がなければならぬ、三島があるいは金山  
があるいは川内がなぜ残らなければならない  
と思ったんでしょうかね、当時の方々は。これ  
川内の方々にもあとでお聞きしたい。なぜ川  
内をそれほどまでに愛し、そして次の世代に  
引き継ごうと思っているのか。なぜなんです  
うかね。どうぞ。

板橋

はつきり答えはこれだっということとは言  
えないと思います。ただ感性だと思えます。

天野

思いでいいです。

天野

これまではね。

榎本

そうですね、これまでは。今も私は都市以外  
の生き方をそんなに知っているわけでは、た  
ぶんないと思うんですけども。ともあれ、都  
市では、貨幣経済にかなりの部分を依拠して、  
食べ物も燃料も何でもかんでも買わないと生  
きていけない。都市では食べ物を含めると生  
み出せませんし、すべてを、電力も含めてで  
す、都市の外に依存しているわけです。でも、  
そうではない生き方が選択可能かもしれない  
場所がきちんと残っていることが、都市にも力  
を与えます。例えば、三島や金山から都市へ出  
ていった人たちの多くは、いつでも帰れる場  
所を持っています。このことは、都市で暮らす  
三島や金山出身の方に、どれほど支えになっ  
ているだろうかと思えます。さらに、最近では、  
三島にも編み組細工を勉強したいといつて都  
会から移り住む人がいたり、金山にも地域おこ  
し協力隊など入ってくる若者がいます。川  
内村にも移住の方がいらっしやると聞きました。  
都市ではできない生き方というのを探す人た  
ちもいて、そういう人たちが行くところがあ  
るということが、とても大事なんじゃないか  
と思います。生き方に選択肢が少ないとい  
うのはやっぱりとても悲しいことで、良くない  
ことです。今は都市にすく過密に人が集まっ  
てますけど、もっといろんな生き方ができる  
ようになったほうが。

天野

板橋

今まで行政に携わってきて、就職してからこ  
ういうことをずっと勉強させられてきたって  
いう感じですね。今つくづく思うことは住み  
慣れた町だからじゃないのって思います。う  
ちもコンビニもないですし、お店は夜7時に  
なると閉まる。買い物は1時間かけて若松に  
行かなきゃならない。でも住み慣れた町なん  
ですね。大雪は降るけれども住み慣れた町。  
それが染みつきちゃってるんじゃないの、住民  
みんながそう思ってるんじゃないのかなと思  
います。いろんな便利なものがあるのでもし  
れないけど、でもその前に住み慣れた町。そ  
れともう一つはプライドですよ、一人一人の。  
例えば私は跡取り息子だと育てられてきたので、  
この家を守らなきゃならない。この家族を守  
らなきゃならないって思ってる。住んでいる  
人たちもそういう思いがあるのかなと思っ  
ている。ふるさとっていうのを大事に持とうと思  
てる。もう一つは、僕と同級生も東京とかい  
ろんなところに住んでるけど、その人たちも自  
分が生まれ育ったふるさとってずっと心に思っ  
ていると思っています。そのふるさとを絶対  
に残さなきゃいけないっていう僕自身のプ  
ライドがあります。

天野

町から出ていった。仕事だったり、いろん  
なことで出ていった人たちのためにも。

板橋

そう。この町を残さなきゃいけない、そう  
いうプライドっていうのが住んでる人たちは

多様なね。

榎本

そうですね。社会全体が強靱な、強いものに  
なれるんじゃないのかなと思ったりします。

天野

なるほど。ありがとうございます。さきほ  
ど昭和30年代から40年代に日本の経済構造が  
変わったっていうお話もありました。つまり  
重化学工業を一所懸命発達させて、日本をも  
と豊かにしようと。その結果我々が経験した  
のは四大公害病と言われた、水俣病とかね、富  
山のイタイイタイ病とか様々あって。そうい  
う状況の中で当時都市部にどんどん人口が流  
入していった。同時にとどまることを知らず  
に地方が都市化していくことを我々経験する  
わけです。そしてやがて中山間地では限界  
集落っていう言葉も生み出すようになった。  
そういう背景の中で今のお二人のお話とい  
うのは、我々はこれからどこに向かって歩い  
ていかなきゃいけないのかということを示し  
てるように思っています。

## そこが駄目だと思えば

約9年ほど前に東日本大震災が起きて、あ  
の時、テレビのコメンテーターが言ってい  
ました。2011年の夏ぐらいかな。ふるさと  
に帰れなくなるかもしれないというテーマで  
話し合われていた時に、そのコメンテーター  
は「ふるさと、ふるさとって言ってもさ、僕の  
親父なんて転勤族だったからね、そこがだめ  
だと思えば移ればいいじゃん別に。何でも

あると思います。そのプライドじゃないのになっ  
て僕は思います。

天野

プライドね。ありがとうございます。榎本  
さんどうでしょうね。

榎本

私自身は客観的に見れば、ふるさとと言  
える場所は東京なんです。ただ私の家族は  
東京に9代住んでいて、東京といっても武蔵野  
のほうですから、かつてそのあたりが村だっ  
た時期を知っている人たちのもとで育ったん  
ですね。祖父母は完全に村の住人という感覚  
でいる人たちでした。新年を迎えるためには  
いまだに臼と杵でお餅をついて、ついたお餅  
でつくったお供え餅をお寺さんに持っていく  
ような、そういう家でした。でも、それを聞  
いていても、自分自身はふるさとと思えるふる  
さとがないような、そういう人間だったかも  
しれません。

## 都市以外の生き方もある

金山に暮らして思っただのは、金山は私にとっ  
ては外国とも言えるような場所なんです。こ  
こにあるのは、私にとってはまだ馴染みのな  
いところの多い異文化なんです。ただ私自身  
は金山と出会って非常に救われたところがあ  
ります。というのは、都市以外の生き方もある  
という、都市の人間にとってもとても大事なこ  
とが、身を以てわかったということ。私は  
都市しか基本的には知らない人間だったので  
すけれども。

なにこだわるのかな」って言っていた。それ  
を例えばみなさんがたは、川内のみなさんがた  
は今それを聞いたとしたらなんて答えますか。  
どうですか。なるほど、それもあるねってお  
思いの方はおそらくいらっしやらないですよ  
ね。きつね。

じゃあなんて思うんですかね。「別にいいじ  
ゃ、そんなにこだわらなくても。住むところ  
なんて他にだっただくさんあるじゃん」って  
言われたら、なんて思いますか。会長何かあ  
りますか。あの時確かにそういう報道、そう  
いう空気があったわけですよ。

参加者・秋元洋子

(川内村コミュニティ未来プロジェクト会長)

今日もそのこといろいろなお話をしまし  
たけども、金山と三島ってずっと写真で見  
ますと、特に金山さんのほうですか、今から言  
えば昭和の、我々の時代かなって思いながら  
見ておりました。先人たちが築き上げてきて、  
そして私たちがそれを見ながら生活してきて、  
自然豊かな環境の中で育ったり見たり聞いたり  
働いたりして。他にはもうあてがないよと、  
川内村でないといろんな意味で住めないねっ  
ていうのを言ってるのと同じかなと、そんな  
ふうに今思っております。

本当に似てるなというのは、25年ぐらい前に  
川内村のある地域でゴルフ場の建設が持ち上  
がって。やっていけばたぶんその地域は潤っ  
たんですけども、自然環境が破壊されるという  
ことで反対した方がいて。やはりふるさとを  
なくすことができない、あてがないと生きて  
いけないよと。大事なものはそこにあるのか  
と思えます。

オープンディスカッション

私たちが  
大切にしたいこと

## ふざけるなっていう レベルでだめです

参加者・志賀風夏(天山文庫管理人)

ふざけるなっていうレベルでだめです。

天野

それはなぜですか。

志賀

1回消失してしまっただものっていうのはも  
う元には戻らないからですね。

天野

じゃあ志賀風夏さんにとって川内村とい  
うのはなくなると、ゼロに戻っちゃったらもう  
つくれないから大事なんですか。それともま  
た別な思いがあって大切だっというふう  
に思っているんですか。

志賀

ふるさとってたぶん人によってイメージが  
違うと思うんですよ。転勤族の人たちにとっ  
てもふるさとっていうのはここかなみたいな  
ものはあると思うし。私みたいに川内村でし  
か生まれ育ってない人にとっては川内村しか  
場所はないですね。だからふるさとって



ても結構形はいろいろかなと思うんですけど、私にとっては1回なくなってしまうたらもうその形には戻らない。そして移るって言われてももうそこは川内村ではないっていうことで替えがきかないものなんですよ。

天野

ありがとうございます。川内村で生まれ育っているんな思いがあるんでしょう。川内村という場所は他にないんだって、唯一無二なんだって言われました。20代ですよ、他の同じ年代の人たちはどんな思いをしているのか、聞いたことがありますか。

志賀

私はこの川内村が好きで帰ってきて、こうやってちょっと物好きな若者みたいな立ち位置になってますけど、他の若者というか同級生たちにとっては、やっぱり田舎であることがコンプレックスなんですね。私以外の子たちは村から出て行ってしまっただけで仕事をしたり、他で結婚して生活したりしてる。

それでいいやって言っても誰も住まなくなってしまうたら、それこそもう帰ってくる場所がなくなる。私の同級生たちにとっては生まれ育った、私の押し付けなんですけど、みんな生まれ育った場所こそがふるさとではないかなって私は考えていて。私が、いいやもう住まない、川内嫌だって言ったらもう私の同級生にとっけて帰るきっかけっていうのもないです。川内村とその子たちを繋ぐ間に立つ人物っていうのがゼロになっちゃうんですね。なので物好きで私は村が好きだから、残ってもいいかって思っただけですね。

天野  
それはどういうことですかね。

原田  
例えば田子倉ダムの集落っていうのが、僕は心情的には一番近いような。

天野  
水没してるってことですね。

原田  
そうですね。生活されていた方が今いらっしやるんでしたっけ。

小林  
只見町の中には。別の場所に家を構えて、別のところで暮らしています。

天野  
移転ということですよ。移転で住まわれている。

原田  
そうですね。そういう方々がふるさとっていうものをどんなふうに使っているのか。町が消えたところでの、みなさんのふるさとっていうのはどんなものなのかっていうのはとても聞きたいですよ。

ふるさとって  
どういう場所ですか

天野  
なるほど。今ね新たに、それぞれにとっ

人たちのかたまりなんだから、それはなくなるの嫌だろうなとはちょっと思いました。

天野

なるほど。自分の生まれたところを離れて今生活してる方も結構いらっしやると思うんですけど、どうでしょうね。離れて、あの頃は若かった頃は、もういいや、こういう田舎はっていうふうにも思ってたけれども、何もみなさんがたが必ずしも田舎者だっていう定義で言ってるわけじゃないんですけど(笑)、一定の歳になったら戻ってみたいって思っただけでいらっしやる方はいらっしやるんですか。

参加者・原田洋二

僕はそうなんです。そうなんです。家が浪江なんです。今は横浜に。浪江では被災してなくて僕は3月11日の時は渋谷にいたんですよ。今65になりましたけど、やはり浪江に帰ってきたいなって気持ちはあります。

天野

なぜそもそも横浜に行かれるようになったんでしょう。

原田

それはもう先ほどからお話に出ています、高度経済成長の恩恵に浴した、流れに乗ったというだけでしょうね。ふるさとっていうのを意識し始めたのは、3・11以降のふるさとの惨憺たる光景をこのままにしておくわけにはいかないというところで、僕は復興の活動を始めたんです。

僕は奥会津のスタディツアーから大熊ですか、

他の子は昔はものすごいコンプレックスだったみたいなんですけど、大人になってくると、ちょっと帰ってみたいとか言うんですね。だからふるさとがないっていうのは悲しいかなって思うんです。

天野

さっきね板橋さんがこの町から出ていった人たちが戻ってくる場所をずっと大事にし続けていく意義はあるんだって言ってました。

志賀

本当にその通りだなと思って。私はいつ帰ってくる人がいてもいいように、川内村はいいところで、川内村に早く帰ってこれるようにってずっと思ってた。いつでも帰れるように、みんなが帰ってこれるように準備していますし、川内村っていうふるさとにプライドがあって、このふるさとの良さを伝えてる感じですね。なので出て行っちゃった人に対してっていう思いはすごくありますね。

村が嫌で出て行っちゃった人っていうのは、とっくに出て行っちゃってるんですね。今、川内村とか金山さんとか三島さんにいる人たちっていうのは結構好きで、今の交通手段とか情報があっても出て行かなかった人たちなんですよ。だから嫌々だったとしても、残れって言われたとか、長男長女だっているものもあるかもしれないんですけど、そこには長女、長男だっているプライドがあったりとか。もう村民じゃなくていいやっていう人たちはとっくに出て行っちゃって、村で生まれ育ったっていうプライドがあって残った人たちがこの村に定着しているわけなので、物好きで、好きで集まっ

私たちが大切にしたいこと  
オープンディスカッション

てふるさとってどういう場所ですかっていうようなことを言われました。ふるさと、それぞれの言葉で言ってみましょうか。一人ずつ、いかがですか。ふるさとってどういうものなんでしょうか。今思いついたことでもいいと思います。イメージでいいと思います。あるいは印象的な言葉でも。

参加者 A

女性だと嫁に行ってしまったりってあると思うんです。最終的に帰ってくる場所っていうことですかね。

天野

なるほど。ありがとうございます。

参加者 B

故郷はいつでも帰っていい場所だと思っております。

天野

ありがとうございます。

## 恋しくて、恋しくて しかたなかった

参加者・西山かね子

原発事故が起きてから川内村は全村民、余儀なく避難したわけですけど。避難先に行ったら前だった生活が失われてしまったんですね。周りに知っている人もいないし、とにかく寂しくて、今まで住んでいた場所が恋しくて、恋しくてしかたなかったんですよね。だからそういう思いですか、恋しい思い。あとは今ま

天野

なるほど。ありがとうございます。じゃあ前に回してください。

事務局・江川トヨ子

私は会津に嫁いでいるんですけど、もともと自分のふるさとというのは本当に素になれるというか、何も飾らなくていられる場所であるか、何となく言葉一つ飾る必要もなければ、本当にジャージひとつでその辺を歩けるような場所であるというか。どのおばちゃんに会っても化粧一つしなくても気軽に喋れるような、そんな自分を開放できる場所だなんて思います。

天野

凄くよく分かりました。じゃあ後ろのほうに。

スタッフ・赤間政昭

僕は福島市に今住んでいるんですけど、12、13年ぐらい前に実家の都合と仕事上、田舎に帰ってきてできる仕事をやってたということがあって戻ってきたんです。もともとはやっぱり田舎、福島というかが、嫌いで。都会に憧れて上京して、何十年もいて。

天野

嫌いだっただというのはどういう。

赤間

都会に憧れていて。地方はダサイというか。ここ5、6年ぐらい前からなんですけど、その嫌いだっただ田舎の風景が、子どもの頃に見えてた福島の盆地の風景とか、そういう子ども心の切ない気持ちをもた体験したいと思うよう

で住み慣れた場所ですね、それが私はふるさとじゃないかなと思います。何もなくてもそこで寛げて、自分が安らげる場所っていうのかな、それがふるさとなのかななんて今は思っています。

震災前はそんなこと考えなかったんですね。それが当たり前だと思っていたので。いったん川内村を離れてようやく、今まで住んでいたところがどんなに素晴らしいところか。不便ではありますけどね、生活はあんまり潤ってないなって思ってたんですけど。心で感じるというか、いつまでも心に染みついている場所。それが避難してからわかった。それが私の避難後の川内の捉え方になってきたなって思っています。

だからそういう気持ちを子どもたちにもね。今子どもって中学卒業するとみんな外に出て行っちゃうんですよね。だけど出て行っても自分は川内がふるさとだったんだってという気持ちを忘れないでほしいなって、そういう気持ちを大事にしてほしいなって思ってた。子どもたちと今そんなふうに触れ合ったりしてると。

天野

ありがとうございます。じゃあ、お隣に。

スタッフ・猪瀬弘瑛(福島県立博物館)

私はふるさとを離れて福島県に来てしまった。ことない県道だったり脇道だったりを遠回りしながら帰ってきたりするんです。時には撮りながら。何でそういうことをやっているのかなっていうと、自分が小さい子どもの時に思っていた田舎の少年の切ない気持ち、そういう気持ちになんとかなくなった気がするんですね。戻れたというか。何で俺そんなこと今やっているのかなって思ったりすることを結構しょっちゅうやってたりします。実は。今日もここに

猪瀬

天野

どこなんですか、ふるさと。

なるほど。仕事で車で郊外に行き帰ってくる時に、普通に幹線を通って帰ればいいんだけど、わざと山の中の切ない田舎の風景の、なんてことない県道だったり脇道だったりを遠回りしながら帰ってきたりするんです。時には撮りながら。何でそういうことをやっているのかなっていうと、自分が小さい子どもの時に思っていた田舎の少年の切ない気持ち、そういう気持ちになんとかなくなった気がするんですね。戻れたというか。何で俺そんなこと今やっているのかなって思ったりすることを結構しょっちゅうやってたりします。実は。今日もここに

天野

いやいや、でも共感できます、すごく。ありがとうございます。

事務局・塚本麻衣子

私も福島出身ではなくて他県から来て、あちこち転々として今福島に落ち着いているところなんです。自分の生まれ故郷も含めて、いつもどこにでもない感じなのが好きで。あつて。会津に来て4年経ちますけど、それでも毎日通る所が新しく見る町みたいに、ある日ふと見えたりすることがあって。それがわりと旅人気質というか面白くもあり、ずっと寂しさを抱えながら動いているような感じがあるんです。だからみなさんが言うふるさとにか

茨城県出身なんです。ふるさとというところやっぱり思い出の塊といますか。生まれ育った場所、不便さも自分の中で可愛らしい思い出というか。平野部ではあるんですが電車も通ってない本場に不便なところ。田園風景が広がっているようなところなんです。不便な中でも子どもの時に友達と森の中で駆けずり回ってカブトムシだのクワガタだのを取りに行ったりとか、そういう思い出とかがある、思い出の塊なので。離れたあともやはり心の中にはその思い出出ているのは残っているなという、そういう特別な場所ですね。

天野

特別な場所ね。ありがとうございます。じゃあ後ろ、港さんいかがですか。

## 故郷を思う人の心

参加者・港千尋

僕は生まれは神奈川の藤沢なんですけど、生まれて小さい頃にもう東京に引っ越したので自分にとつてのふるさとっていう感覚はあんまりないんですよね、何回か引っ越したこともあって。そうするとですね、ふるさとって聞くと、母親とか父親のふるさとのことをすぐ思うんですよ。ふるさとっていいところだな、帰りたいなっていう父親とか母親の姿やその時の声とかね、そういうのが僕にとつてのふるさとでね。ふるさとを思う人の心かな、自分じゃなくてね。特に両親。だから両親ってどこから来たかっていうのがやっぱりなんか近いんですかね、ふるさととの感覚に。

ける強い思いというのは本当のところかわかり切れないところもあるのかもしれないなと思ってるんです。そういう在り方のまま私のようなふるさとを思っているものもあっていいと思うし、だからこそふるさとに憧れる気持ちもあるんですね。そう言いながら生まれ故郷のこと、たまにふつと蘇ってくる海の風景とか雪の風景とかあって。これから出身地に帰ることはあんまりないのかなとは思いますが、心にはふつと蘇ってくる風景は必ずあるなと思っていて。それを持っていることが私にとつてのふるさとかなと思っています。

天野

なるほど。ありがとうございます。じゃあ、小林さん。

小林

震災後に、私の体は福島でできてるんだなって思うようになったんですよ。父が定年退職してから母の実家の伊達市の空いた土地で畑をしていて、震災前から私に野菜を送ってくれているんです。それを食べて自分の体はずつとつくられてきているなっていうのをすごく震災後に感じて。正確に言うと原発事故後ですね。父が「ちゃんと線量を計ったから」っていうメモを入れて野菜をよこすようになったのね、2011年から。聞いてもないことを、伊達でつくった野菜だと心配するだろうからって計って入れる、そういう野菜で私の体はできているって思った時に、私の体をつくっているのはこの土地なんだなって思ったんですよ。それが愛おしくもあり、そんなことを父に心配させるような土にしちゃったことに対して

私たちが  
大切にしたいこと

の怒りみたいなのもあって。食べるものできている私たちの体は絶対にこの土地と繋がっていて、だからこそあの時私たちはとても怒ったんだなと思ってもいて。ふるさとってそういう場所でもあるんじゃないかなと思っていきます。

**天野** なるほど。ありがとございました。さあ。

**小林** 天野さんは。

## ふるさとは 単なる場所じゃない

**天野**

僕ですか。僕喋ると長くなるからな。田舎は嫌だったんです。だから出て行った。ある同級会をやったら三つぐらいのグループに分かれた。会津ですと暮らして会津弁で喋ってる、パン屋とか地元の信用金庫とかに勤めているグループ。県内にはいるけれども、そこにはないグループ。僕もそうですね。それから首都圏をはじめとした県外に行つて、そうじゃん、違うじゃん、さすけねえじゃんと言ってる人たち。僕、幹事だったもんで、その様子を眺めていた。さつきね、榎本さんが幸せ感、幸せの形って言ってましたけど、何が幸せだったのかなって思った。朝そこで起きて、そこで朝ご飯を食べて、そこで仕事をして、寝に帰って、そして翌朝を迎えてっていう、当たり前前の方が本当は当たり前じゃないんだって。ふるさとってひらがなで書くとたった四文字

ころでは暮らせないとか、どんなに不便でもここがいいんだという人たちの気持ちも、分かるような気が次第にしています。

**天野**

ありがとございます。すごく共感しながら書いていました。あらためてみなさんのお話を伺って、ふるさとって板橋さんにとってどういう場所なんですか。

## 「さすけねえか」

**板橋**

一つエピソードがあります。成人式、うちの町は夏にやるんですね。今年は6人の方が成人式を迎えました。毎日新聞の記事にもなったんですけど、そのうちの1人の女の子は若松の高校を卒業して短大に行きました。演劇がずっと好きで好きで、短大も演劇の専門の短大に行つて、そこで2年生をやつた。「さすけねえ」っていう言葉ありますよね。この子が私たちに言ったことは、ふるさとに帰ると必ず近所のおじさんおばさんたちが「さすけねえか」って声をかけてくれる。でも都会の生活を2年間やってると、別に隣の家のことは何も考えてないし、大学で生活していても言われることもない。そういうふう私を常に安心させてくれたりほっとさせてくれたり、元気づけてくれたりっていうところがふるさとじゃないかなと、彼女は卒業制作として、「さすけねえ」っていう題目で演劇をやつたそうです。そうしたら先生から、あなたの住んでいる町っていうのは宝物だねっていう講評をいただいたっていうことを彼女は成人式の時にエピソード

字だけで、これがものすごいことだったんじゃないのか。あとでまとめのころでもお話ししたいと思つてたんですけど、ふるさととは単なる場所じゃないんだなっていうふうに思っています。

ふるさとって、みんな田舎にいるからさ、田舎を基準にお話ししたりするけど。東京だつていう方何人かいらつしやる。あるいは転々としてるって方もいらつしやる。人みたいなどころも含めて、なんか見えてきたような気がするんです。

金山で過ごす人たちっていうのは榎本さんにはどんなふう映っているんですかね。

## かけがえがない大事な場所

**榎本**

私の母方は杉並の下高井戸に9代ずっと住んでいて、今もそこに実家があります。祖先是甲州街道の高井戸宿の宿屋をやつていたそうです。下高井戸に住んでいた時は、いい大人になつても、夜7時ぐらいに家を出て駅に向かつて歩いていたら、もう夜だよ、家はあつちだよと近所のおじさんに言われるような生活をしていました。

その後、金山に移り住む前に3年新潟に住みました。私はその時に、初めて都市的な、隣人が誰も私を知らない生活をしたのだと思います。私が都市ってこういう生活なんだっていうのを初めて感じたのはその時です。

金山に引越したのはそういう経験をした後のことでした。東京にいる時には、下高井戸はふるさとのような、ふるさとでないような場所でした。祖父母が語る牧歌的な下高井戸

ドとして話してくれました。

やつぱりふるさとってそういうところじゃないのかなって僕は思います。一人一人が、住んでいる人たちが生きがいを感じていなければいんじゃないのかな。ここで生活している生きがい。自分たちが楽しく生活してればいいのか。もちろん便利なこと不便なことありますけど、そのポリシーをしっかり持つことじゃないのかなって。町外に住んでいる人たちが、ここの町に住んでみたいなって感じればいいし。逆に都会に行つて生活している人たちが、やつぱりふるさとっていいなっていうか戻ってきたいって思うようになればそれでいいんじゃないかなって、僕は思っています。それがふるさとであつて、自分の町を残していかなきゃいけないっていう原点じゃないのかなって僕は思っています。

**天野**

なるほど。ありがとございます。まだまだね、話し足りない部分いっぱいあるんです。今日お話しできなかった不便っていう価値観のお話、それから幸せ感とか幸せの形、幸せってそもそも何なのっていう幸福論みたいなお話もしたかったですよね。その上で今ふるさとっていうところとどまってるんですけれど。

## コミュニティがなくなつて るのはむしろ地方なんじゃないのか

私は子どもが東京の学校に行つていた時期があつて。その時に代田橋っていう新宿から二つ目ぐらいかな、三つ目ぐらいの駅で下りて、

村の姿、田んぼとか、暗渠化する前の玉川上水の話は、私にとってはピンとこない話でした。けれども、金山に来て初めて、祖父母が懐かしがっていたのはこういう風景や暮らしたかったのかなというのを感じました。私は金山という場所を経由して、祖父母にとつてのふるさと—そこは空間的には私のふるさとでもありませんが—というのはこういう場所だったのだろうと知つたのですね。

私にとつて金山はふるさとと呼べるような場所であるかどうかはわかりません。けれども、3年暮らすと次第に金山の固有性が見えてきます。とはいえ、その固有性は大げさなものではなく、とても些細なものかもしれません。固有性のほとんどは他の山間地の人たちと共有できるようなものだったり、場合によっては東京の人が金山の写真集を見て懐かしいって言つたりするように、全国的に見ても普遍的なものの方が大部分を占めるなかで、小さな小さな部分でしかないのかもしれないですけど。しかし、そういうささやかな固有性が、それでも他とは取り換えがきかないということが、だんだんと見えてきますし、感じられてきます。

私が金山に帰ると、今でもお隣さんたちは「おかえり」と迎えてくれます。何も言わず知らせずに金山に帰つて、「家に電気ついてたから」って野菜を持ってきたりしてくれることもあります。なんというか、この人たちは自分があることを許してくれているんだな、喜んでくれているんだなというのを感じます。金山は自分にとつてかけがえがない大事な場所、安心できる場所、きつとその感覚はいわゆるふるさとを持つ人たちの感覚と似たところがあるのだろうなと思います。ヤマのないと

一歩外に出た時に俺ここに来たことあると思つたんです。いやないんですよ。だけどあるって思つたんです。駅から一歩外に出たら小さいスーパーあつて、京王のスーパーがあつて、そこにクリーニング屋があつて、蕎麦屋があつて、それから八百屋があつて向かい側に肉屋があつて。車なんかもちろん入れない、細い路地ですから。それでそのショーケースごしに「豚こま120g」とかやつて買い物している人たちがいて。何でこんな懐かしいんだらうって。ここに来たことあるな、俺って。行つたことないのに。東京の話です。そこにはやつぱり、そこで生きている人たちの暮らしがあつた。

また別な時に麻布に泊まつたんです。下の子は江古田の駅で降りるんです、学校が。江古田の町が非常に懐かしくて。ナポリタンがね、フォークが刺さつて空中に浮いているようなメニューのサンプルが店の入口にあつて、それも非常に懐かしかつたんですけど。泊まつた麻布でホテルから出発して、引越してますからね、アパートに行こうと思つたらお神輿の子どもがはしゃぐような声が聞こえた。これお神輿の声に似てるなつて思つて。近づいていたらお神輿なんです。テントが出て。何をやってるんですかって聞いてみた。法被着てる人たちに向かつてね、何やってるんですかっていう話もどうかと思いますけど。お祭りをやっていますと。マンションに子どもたちがいっぱいいると。近隣の子どもたちを集めてずつとこのお祭りをやつてるって。

地方が歩いて暮らせるまちづくりとかやつてるけど、こつちの人たちは歩いて暮らすしかなないんだなつて。しかもコミュニティがなくなつてるのはむしろ地方なんじゃないのか

私たちが  
大切にしたいこと

オープンディスカッション

ていうふうな思いがあったんですね。

## 死にがいのある町

あらためて、ふるさとということでも少しまとめさせてください。みなさんがたのお話を聞いていると、ふるさととは場所じゃないってみんな言っていた。ただの場所じゃないって。例えば川内村という場所じゃなくて、その村の中に住んでいる一人一人がいて、その人たちとの繋がり、ふるさとで生きている人たちからそれをバトンタッチされていく人たちの姿の集合体だって。

それをもっと言うように死にがいていう言葉で説明できるんだろうと思うんです。生きがいていう言葉はさっき板橋さんが言っていました。僕が言おうとしていることはさっきお話しに出てきたふるさとの機能ということに対する僕の考えなんです。ふるさとで暮らしているふるさとで生きている人たちがいて、そこから学んでという言葉を挟んでもいいと思いますけど。それをバトンタッチされて受け取っていく人たちの姿、つまり持続可能になっていくことなんだと思うんですけど、そういう集合体なんだろうって思うわけです。

今日の板橋さんの報告も三島の中でそれを生業として、暮らしの中でずっと紡いできて、それを受取るうとする人たちがいて。金山の榎本さんの写真、象徴的でした。ダム2枚の対比がありましたよね。一方はダム全体の、場所ですよ、ただのね、あれは言ってみたら。もう一つはそこで仕事をしている人たちの姿があって。人というものを通してその繋がりの中で我々は生きているんだし、暮らし

ていうこと。ふるさとの中で紡がれていく暮らしっていうもの。我々は次の世代にもバトンタッチしていかなくちゃいけないんじゃないか。まさに死にがいていうのはそういう言葉でその土地で生まれ、あるいはその町に住んで、あるいはその町で暮らして、その町でご飯を食べて。その町でお風呂に入って、その町で眠っている。そういう町を次の世代にも受け継いでいきたいって。繋いでいきたいんだって。

自分の代で終わりにしたくないっていうことを、死にがいのある町と言う。これはまちづくりの運動から生まれてきた言葉ですけど。生きがいは個人でやればいいですよ。釣りだとか、ロードバイク乗るのが生きがいで。それは個人の目的、目当てですけど。でも死にがいは一人ではできない。

今ここにいる人たちはそれぞれ、板橋さんはこれからもずっと三島で暮らして紡いでいて、次の世代にどうやってバトンタッチしていくかってことを考え続けるだろうし。榎本さんはファインダーを通して、あるいはその土地の方々と、金山から別の土地に移るかもしれないけど、でもきつとおそらくまたそこで人との関係性の中から発信をし続けていくだろうし。

みなさまそれぞれいるところで、ずっと問い続けていく。時には腹を立て、時には共感し、時には笑って。それでもやっぱり次の世代に受け渡していこう、バトンタッチしていこうという気持ちのままやり続けていくんだらうなということを感じました。

みなさんがたお一人お一人からお話が聞けたことも本当に良かったと思います。板橋さん、それから榎本さん、本当にありがとうございました。

ました。もう一度お二人に大きな拍手を。そしてこういう場をつくってくださったライブミュージアムネットワークのみなさん本当にどうもお疲れさまでした。ありがとうございました。ここで私の役割を終わらせていただきます。本当にありがとうございました。

### 小林

みなさんありがとうございました。後半からあつという間の時間でした。

みなさんおっしゃっていましたけども、もっと話したい、話し足りないぐらいだったので機会があればまた第2第3の場を作ればと思っています。この場合は、川内村の教育委員会のみなさんにご協力いただきまして、天山水庫の16時以降の閉館の時間特別にお借りしてできました。今日の昼間、天山水庫の管理人でもある志賀さんに教えていただきましたけど、心平さんがシルクロードのようにいろんな人が出会う場所でありたいと「天山」と名づけられたこの場所で、こうやって奥会津と川内のことをみなさんと話せて良かったなと思っています。

こんな場所があることは川内の大きな強みの一つだと思います。二こと、心平さんの審美眼とみなさんの記憶の欠片が詰まった阿武隈民芸館が、これからもみなさんに大事にしてくださいいただければなとも思っています。今日は本当にありがとうございました。お三方に拍手をお願いいたします。



オープンディスカッション

私たちが  
大切にしたいこと